

渡来象の宿泊記録

享保十三年（一七二八）六月、八代將軍徳川吉宗の上覧に供する目的で、中国商人の手により広南国（ベトナム）から雌雄二頭の象が長崎に渡来した。このうち雌象は長崎滞在中に病死してしまいが、残った雄象は翌十四年三月一三日に長崎を出発、二カ月あまりをかけて山陽道・東海道を通行し、五月二十五日に江戸へ到着、二十七日には江戸城において吉宗の上覧をうけた。

国文学研究資料館所蔵の遠江国引佐郡気賀宿中村家文書には、このとき通行した渡来象の宿泊記録が残されている。気賀宿は、浜名湖を迂回するように東海道の御油宿（愛知県豊川市）と見附宿（静岡県磐田市）の間を結ぶ本坂通り（姫街道）の宿場である。幕府は渡来象の輸送にあたり、船を使わず街道を歩かせて移動する方法をとった。浜名湖近くの今切の渡船場についても、本坂通りへと回り道するルートを選んでいった。

図1は「気賀御関所 往来留書之写」第二冊の享保十四年五月九日の記事である。ここでは、広南国から長崎に着いた「御用牡象」

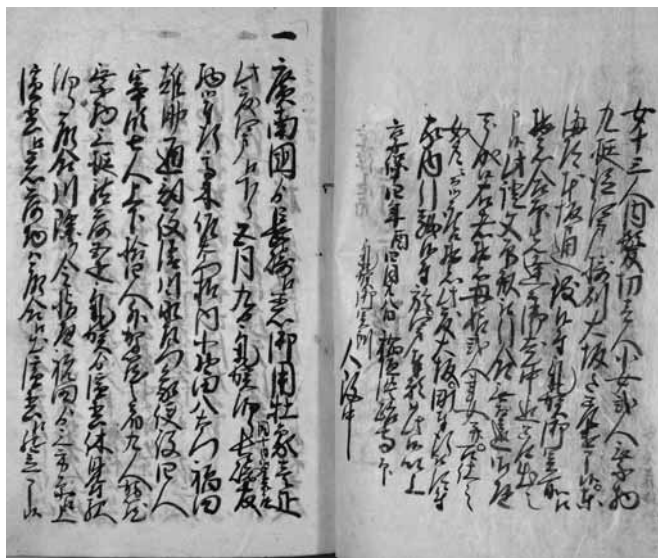


図1 「気賀御関所 往来留書之写」第二冊（部分）

が江戸へ向かうため、五月九日に気賀宿に宿泊し、翌十日に関所を通過した旨が記されている。渡来象に随行したのは、長崎奉行高木作右衛門配下の小野田八右衛門・福田雄助および通詞役一名、象使い四名、率領七名・駕籠かきの者九名などであった。

図2は、幕府から出された渡来象の情報をもとめた「御用象本坂通之節御触書之写」の一部で、大坂に到着した象の様子や事前準備の心得を通行先の宿場へ伝えたものである。ここには、①象はふだんの様子と違うことや犬猫の声を嫌うので、通行当日は犬猫を一切差し置かなかつた、②油屋・鍛冶屋や家作普請など、大きな音が出る作業は一切差し止めた、③餌となる鰻頭は、米鰻頭ではなく麦鰻頭を八〇個ほど用意し、このうち二〇〜三〇個は餵入りの鰻頭とした、④笹の葉は、どんな種類の笹でも構わない、⑤いたぶ（いぬびわ）・かづら（蔓草）は以前に出された書付の通りに用意しなくてはならないが、姫草は少し用意すれば問題ない、⑥大唐米は四升ほど炊いておき、象使いへ渡した、⑦人々は簾を下げて見物し、象の通行の障りになるものは、門や家であっても撤去した、⑧象の餌を置いたため、藎が三〜四枚ほど必要である、といった大阪からの報告内容が記されている。

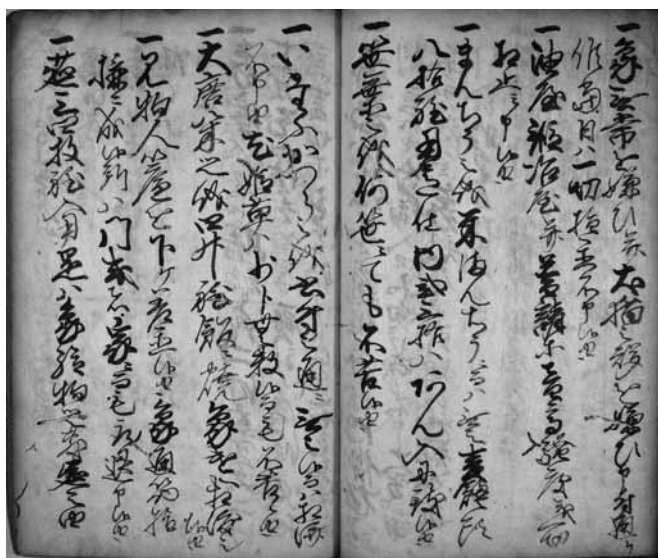


図2 「御用象本坂通之節御触書之写」（部分）

前代未聞の渡来象の通行・宿泊のために、幕府や街道筋の宿場が、盛んに情報をやり取りしていたことがわかる興味深い史料である。

（太田尚宏）